

16 東京の水道の歴史

江戸時代の水道

東京の水道の歴史は、遠く江戸時代に遡ることができます。

江戸時代の水道は上水とも呼ばれ、石や木で造られた水道管（石樋及び木樋）によって上水井戸に導かれ、人々はそこから水をくみ揚げて飲料水・生活用水として使用しました。

江戸上水の起源は、天正18年（1590年）、徳川家康の江戸入府時に開設された小石川上水といわれ、これは後に神田上水へと発展したと考えられています。

その後、上水は順次拡張され、承応3年（1654年）には玉川上水が建設され、さらに、元禄9年（1696年）までに、本所（亀有）上水、青山上水、三田上水及び千川上水が整備されました。

しかし、享保7年（1722年）、神田上水及び玉川上水以外の4上水は廃止され、江戸時代の後半は主に神田上水及び玉川上水の2上水が江戸の暮らしを支えました。

近代水道の創設

明治時代を迎え、江戸から東京へと変わりましたが、水道は依然として江戸時代の神田上水及び玉川上水を利用していました。

しかし、上水路の汚染や木樋の腐朽といった問題が生じ、また、消防水の確保という観点からも、近代水道の創設を求める声が高まりました。さらに、明治19年（1886年）のコレラの大流行は、近代水道創設の動きに拍車を掛けました。

こうして、明治21年（1888年）、東京近代水道創設に向けて具体的な調査設計が開始されました。

この水道は、玉川上水路を利用して多摩川の水を淀橋浄水場へ導いて沈殿及びろ過を行い、有圧鉄管により市内に給水するもので、明治31年（1898年）12月1日に神田・日本橋方面に通水したのを初めとして、順次区域を拡大し、明治44年（1911年）に全面的に完成しました。



これまでの歩みと今後

近代水道創設工事完成から2年後の大正2年（1913年）には、村山貯水池及び境浄水場の建設を中心とする第一水道拡張事業が開始されました。

関東大震災の後、都市化の波は東京市の近郊に及び、昭和7年（1932年）、町営・町村組合経営の10水道は市営に統合されました。

また、民営3水道も順次買収し、東京の水道の原形が整いました。

市域拡張に伴って増大する水需要に対応するため、小河内貯水池及び東村山浄水場の建設を中心とする第二水道拡張事業が昭和13年（1938年）に着工されました。

第二次世界大戦後は、焼け跡の漏水修繕等復旧作業に全力を傾けるとともに、戦争により中断していた第二水道拡張事業等を再開し、また、相模川系水道拡張事業等の事業を開始しました。

昭和30年代の戦後の復興期から高度経済成長期に入ると、東京は急激に発展し、水の需給は更にひっ迫してきました。これを解消するため、長年の悲願であった利根川を水源とする新たな拡張事業が四次にわたり展開されました。この結果、金町浄水場及び東村山浄水場の拡張、朝霞・小作・三園及び三郷の各浄水場の建設、送・配水幹線網整備等が順次進められ、東京都水道局の浄水場は現在では1日当たり684万立方メートルの施設能力を有しています。

そして近年は、安全でおいしい水に対するニーズの高まりに応えるため、利根川系原水全量を対象とした高度浄水処理の導入を達成したほか直結給水化の促進等、お客さまにお届けする水のおいしさについての改善も進めており、東京の水道は供給する水の量のみならず、質の面においても世界有数のレベルに達しています。

今後、東京都水道局は、将来にわたり、安全でおいしい水を安定的に供給するため、環境負荷低減に取り組みつ、安定した水源の確保や耐震性強化、浄水場の更新等に引き続き取り組んで参ります。さらに、これまで近代水道創設以来120年以上培った技術を基に国内外への貢献を進め、水道界をリードする水道を目指します。